

〈原著論文〉

看護学士課程におけるディプロマ・ポリシーと卒業時到達目標の到達度を用いた教育評価

Educational Measurement for bachelor of nursing by Achievement Level of Diploma Policy and Graduation Goals

清水 昌美¹, 中尾 友美², 本田 由美³, 生駒 妙香⁴
石井 あゆみ⁵, 後藤 小夜子⁶, 藤田 俱子⁷

要旨

目的: 看護学士課程に在籍している学生のディプロマ・ポリシーおよび学士課程における看護実践能力の到達状況とその関連を把握し、教育上の課題を明らかにする。**方法:** 看護学科に在籍する1～4年生の学生に、看護学士課程における卒業時到達目標およびディプロマ・ポリシーについて質問紙調査を実施した。学年間のディプロマ・ポリシー到達度の割合を比較するとともに、ディプロマ・ポリシーと卒業時看護到達目標との関連を分析した。**結果:** 4年生は、ディプロマ・ポリシー1～7で身についた群の割合が高かったが、ディプロマ・ポリシー8は全学年の中で最も低かった。ディプロマ・ポリシーが身についた群の割合は、2年生と3年生の差が顕著であり、ディプロマ・ポリシー2～7において、学年間に有意な差がみられた。ディプロマ・ポリシー8は、1年生で身についた群の割合が最も高く、新カリキュラムが到達度に貢献している可能性が示された。ディプロマ・ポリシーと卒業時到達目標の到達度の比較により、ディプロマ・ポリシー2～8と卒業時到達目標の関連が示された。考察: 今後、旧カリキュラムの学生に対する社会参画力を高める働きかけが必要である。また、教育の特色の明確化、教育評価内容の具体化および可視化を図るとともに、継続的な調査による分析が必要である。

キーワード: 看護大学教育, ディプロマ・ポリシー, 専門能力, 臨床能力, 教育評価
Baccalaureate Nursing Education, Diploma Policy, Professional Competence,
Clinical Competence, Educational Measurement

I. 緒言

少子高齢化の進展や先端的な技術革新などの社会の変化に応じて、教育も変革を迫られている。看護基礎教育においては、2019年10月に厚生労働省の看護基礎教育検討会により、「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」および「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン」の改正案の最終の報告書が提言され、多様な実習施設における実習の推進を図るための一部要件の緩和な

どにより、教育内容や教育体制の見直しが求められている(厚生労働省, 2019)。また、高等教育全体に対しては、2018年11月に中央教育審議会より「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」が提言され、高等教育が目指すべき姿として、「何を学び、身に付けることができたのか」という学修者本位の教育への転換を進めること、このための多様で柔軟な教育研究体制が準備され、学修成果が可視化されることなどによって教育の質が保証されることが期待されている(文部科学省,

1	Masami SHIMIZU	千里金蘭大学	看護学部	看護学科	受理日: 2020年9月4日 査読付
2	Tomomi NAKAO	千里金蘭大学	看護学部	看護学科	
3	Yumi HONDA	千里金蘭大学	看護学部	看護学科	
4	Taeko IKOMA	千里金蘭大学	看護学部	看護学科	
5	Ayumi ISHII	千里金蘭大学	看護学部	看護学科	
6	Sayoko GOTOH	千里金蘭大学	看護学部	看護学科	
7	Tomoko FUJITA	千里金蘭大学	看護学部	看護学科	

2018)。

1992年の「看護師等の人材確保の推進に関する法律」の施行以降に急増した看護系大学の教育の質保証については、2001年に看護学教育のあり方に関する検討会が設置され、その後議論が重ねられてきた。2017年には、看護学教育モデル・コア・カリキュラム（文部科学省, 2017）が策定され、「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学習目標が示された。また、文部科学省での検討内容を受け、日本看護系大学協議会より看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標として、6群25項目が示されている（日本看護系大学協議会, 2018）。しかし、モデル・コア・カリキュラムの活用においてはカリキュラム編成上の参考にとどめられており、各大学には特色ある独自のカリキュラムを構築することが期待されている。

A大学の教育評価の取り組みについては、学生支援に関する諸データの総合的分析と情報提供・助言等を行い大学教育・学生支援に係る各機能の向上を図り、教育活動の発展に寄与することを目的としたIR推進室が設置されている。アドミッション・ポリシーを満たす人材かどうかの検証として、入学前・入学直後のアンケートの実施、カリキュラム・ポリシーに則って学修が進められているかどうかの検証として、在学生の学修習慣実態調査、GPA、留学・退学・留年率などの調査、ディプロマ・ポリシーを満たす人材になったかどうかの検証として、実習終了時の看護技術チェックリストを用いた達成度の評価、卒業時の学修習慣実態調査、国家試験合格率などの調査を行うことで、一定の教育の質が担保されていると考える。しかし、ディプロマ・ポリシーの到達度の評価は、卒業時のみに実施しており、初年次からの段階的な評価はで

きていない。また、看護実践力がどの程度身につけられたかという点においては、現行のディプロマ・ポリシーや看護技術チェックリストを用いた達成度の評価のみでは、十分とはいえないと考える。そこで、看護学部の学生の教育評価に、「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時の到達度目標（日本看護系大学協議会, 2018）」を加え、ディプロマ・ポリシーとともに評価することとした。看護学士課程教育における卒業時到達目標とディプロマ・ポリシーの到達度の関連を検討することで、卒業時の目標到達度を踏まえた大学での今後の教育内容について検討することができる。

本研究の目的は、看護学士課程に在籍している学生のディプロマ・ポリシーおよび学士課程における看護実践能力の到達状況とその関連を把握し、教育上の課題を明らかにすることである。

II. 研究方法

1. 対象者

2019年度にA大学看護学部看護学科に在籍している（卒業時を含む）学生である。

2. 調査内容

調査内容は、A大学のディプロマ・ポリシー8項目（表1）および「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（以下、卒業時到達目標とする）」66項目である。卒業時到達目標は、6つの群からなるコアコンピテンシーに対応して作成されており、I群の対象となる人を全人的に捉える基本能力8項目、II群のヒューマンケアの基本に関する実践能力6項目、III群の根拠に基づき看護を計画的に実践する能力16項目、IV群の特定の健康課題に対応する実践能力16項

表1 A大学看護学科 ディプロマ・ポリシー

知識・技能	教養・専門性・ 総合力	自らを育て自立した女性として、幅広く深い教養を修めるとともに、命の尊厳を基盤とした豊かな人間性、倫理観、責任感を身につけている。
思考力	問題解決・発見力	人々を取り巻く環境の変化や健康問題を発見し解決する能力を身につけている。
	論理的・批判的思考力 客観的思考力	健康課題に対し、批判的・分析的・論理的思考能力を身につけている。 あらゆる状況において、科学的・客観的視野に立って的確な判断ができる能力を身につけている。
	生涯学習力	健康課題に対し、常に新しい技術や知識を探求する姿勢と柔軟な創造性を身につけている。
実践力	自律的活動力	効果的な看護実践に向け、主体的に取り組む力を身につけている。
	人間関係形成力	人間を一つの人格として全体的に捉え、豊かな対人関係能力を身につけている。
	社会参画力	市民社会の一員として、異文化への理解と社会に貢献する姿勢が身につけている。

目、V群の多様なケア環境とチーム体制に関する実践能力17項目、VI群の専門職として研鑽し続ける基本能力3項目からなる。ディプロマ・ポリシー、卒業時到達目標ともに、調査項目ごとに現時点での到達状況について4段階での自己評価を求めた。

3. データ収集方法

2019年度末の各学年の次年度に向けたオリエンテーション時（4年生は卒業連絡時）に、研究対象者に質問紙調査票を配布した。その際、研究に関する説明を文書と口頭で説明し、同意が得られる場合は、同意書の記載を依頼した。同意書の回収は、1週間の期間を設け指定の提出場所に提出を依頼した。

4. 分析方法

ディプロマ・ポリシーは、「かなり身についた」、「ある程度身についた」を身についた群、「あまり身につけていない」、「全く身につけていない」を身につけていない群とし、 χ^2 検定を用いて学年間の比較を行った。また、ディプロマ・ポリシーと卒業時の到達目標との関連について、学年別にMann-Whitney U検定を行った。統計分析はSPSS ver.26（IBM社）を用い、有意水準は5%未満とした。

5. 倫理的配慮

研究対象者には、研究の目的と方法、協力は自由意志であること、随時同意撤回の申し出を受け入れること、研究への不参加が個人評価には全く影響しないこと、調査票は記名式であるが、個人が特定されないようデータ入力には外部委託し、通し番号にて分析することを口頭と文書で説明し、同意書をもって同意を得た。本研究は、千里金蘭

大学疫学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号K19-025）。

III. 結果

調査票は400名に配布し、399名より回答があった。その中で、研究の同意が得られた374名のうち、欠損値のあるものを分析対象から除外し、350名（1年生91名、2年生88名、3年生97名、4年生74名）の調査票を分析対象とした。

1. ディプロマ・ポリシーの到達状況

表2のとおり、卒業時（4年生）は、ディプロマ・ポリシー（以下、DPとする）1～7で身についた群の割合が95%以上であり、DP2およびDP7においては、身についた群が100%であった。一方で、DP8は身についた群の割合が70.3%にとどまっておらず、全学年の中で4年生が最も低い値であった。3年生は、DP3の身についた群の割合が4年生より3.1ポイント低かったが、概ね4年生と近い値であった。DP2～7で2年生より身についた群の割合が8ポイント以上高く、2年生と3年生の差が最も顕著であった。2年生は、全体的に1年生との差がみられず、DP3、4、5、7、8においては身についた群の割合が1年生よりも低かった。1年生は、DP8の身についた群の割合が86.8%と全学年の中で最も高かった。また、DP1、DP7は、身についた群の割合が90%以上と高い値を示していた。 χ^2 検定では、DP2～7において、学年間に有意な差がみられた（ $p < 0.05$ ）。

表2 ディプロマ・ポリシー別身についた群学年間の比較

ディプロマ・ポリシー	全体 (n=350) n (%)	1年生 (n=91) n (%)	2年生 (n=88) n (%)	3年生 (n=97) n (%)	4年生 (n=74) n (%)	CramerのV	p値
DP1 女性としての幅広い教養と豊かな人間性、倫理観、責任感	340 (97.1)	86 (94.5)	85 (96.6)	96 (99.0)	73 (98.6)	0.109	0.246
DP2 環境の変化や健康問題を発見し解決する能力	328 (93.7)	80 (87.9)	79 (89.8)	95 (97.9)	74 (100.0)	0.210	0.001
DP3 健康課題に対する批判的・分析的・論理的思考能力	313 (89.4)	78 (85.7)	74 (84.1)	90 (92.8)	71 (95.9)	0.155	0.037
DP4 科学的客観的視野に立った確かな判断ができる能力	313 (89.4)	80 (87.9)	70 (79.5)	92 (94.8)	71 (95.9)	0.211	0.001
DP5 新しい技術や知識を探求する姿勢と柔軟な創造性	313 (89.4)	78 (85.7)	72 (81.8)	92 (94.8)	71 (95.9)	0.193	0.005
DP6 効果的な看護実践に向けた主体的に取り組む力	327 (93.4)	80 (87.9)	79 (89.8)	95 (97.9)	73 (98.6)	0.192	0.005
DP7 人間を一人の人格として全体的に捉えた豊かな対人関係能力	331 (94.6)	85 (93.4)	77 (87.5)	95 (97.9)	74 (100.0)	0.208	0.002
DP8 市民社会の一員として異文化への理解と社会に貢献する姿勢	274 (78.3)	79 (86.8)	66 (75.0)	77 (79.4)	52 (70.3)	0.145	0.062

χ^2 検定 有位水準 $p < 0.05$

2. ディプロマ・ポリシーと卒業時到達目標の到達度との関連

DPの到達度が学年間で異なっていたため、学年別に卒業時到達目標の群別の合計点をDPの身についた群と身についていない群で比較した。

1) 1年生の結果(表3)

DP1では、全ての群の到達度に有意な差はみられなかった。DP2、DP4では、全ての到達度に有意な差がみられた(p<0.05)。DP3、DP6では、I群、II群、III群、全体(合計)の到達度に有意な差がみられた(p<0.05)。DP5では、II群以外、DP7では、I群、II群、III群の到達度に有意な差がみられた(p<0.05)。DP8では、IV群以外の到達度に有意な差がみられた(p<0.05)。

2) 2年生の結果(表4)

DP1では、全ての群の到達度に有意な差はみられなかった。DP2では、I群、II群、III群、V群、全体の到達度、DP3では、I群、III群、V群、全体の到達度に有意な差がみられた(p<0.05)。DP4、DP6では、II群、III群、全体の到達度に、DP5では、I群、III群、全体の到達度に有意な差がみられた(p<0.05)。DP7では、I群、II群、III群、VI群、全体の到達度、DP8では、VI群以外の到達度に有意な差がみられた(p<0.05)。

3) 3年生の結果(表5)

DP1、2、6、7は身についていない群の度数が3以下であったため、DP3、4、5、8のみ分析を行った。DP3では、到達度目標I群、III群、IV群、V群、全体の到達度に有意な差がみられた(p<0.05)。DP4、DP5では、II群以外の到達度に有意な差がみられた(p<0.05)。DP8では、VI群以外の到達度に有意な差がみられた(p<0.05)。

4) 4年生の結果(表6)

DP1、2、6、7は身についていない群の度数が3以下であったため、DP3、4、5、8のみ分析を行った。DP3、DP4では、V群以外の到達度に有意な差がみられた(p<0.05)。DP5では、I群の到達度、DP8では、I群、III群、IV群、V群、全体の到達度に有意な差がみられた(p<0.05)。

IV. 考察

1. ディプロマ・ポリシーの到達状況

本研究において、4年生の卒業時点のDP到達度はDP1~7で高い値を示したが、DP8については1年生が最も高く、4年生が最も低かった。A大学では2019年度よりカリキュラムが一部変更となり、社会活動や学年間交流を通じて多面的な対人

表3-1 1年生のディプロマ・ポリシー別能力の有無による卒業時到達度の比較

N=91

卒業時到達目標	n(%)	DP1:女性としての幅広い教養と豊かな人間性、倫理観、責任感			DP2:環境の変化や健康問題を発見し解決する能力			DP3:健康課題に対する批判的・分析的・論理的思考能力			DP4:科学的客観的視野に立った確な判断ができる能力		
		身についた	身についていない	p値	身についた	身についていない	p値	身についた	身についていない	p値	身についた	身についていない	p値
		86 (94.5)	5 (5.5)		80 (87.9)	11 (12.1)		78 (85.7)	13 (14.3)		80 (87.9)	11 (12.1)	
I群合計	中央値(範囲)	23.0 (15-32)	21.0 (20-27)	0.462	23.0 (16-32)	20.0 (15-24)	0.002	24.0 (16-32)	20.0 (15-23)	0.000	23.5 (16-32)	20.0 (15-23)	0.000
II群合計	中央値(範囲)	18.0 (12-22)	17.0 (12-21)	0.479	18.0 (12-22)	15.0 (12-17)	0.000	18.0 (12-22)	15.0 (12-21)	0.000	18.0 (12-22)	15.0 (12-21)	0.007
III群合計	中央値(範囲)	44.0 (29-57)	46.0 (31-49)	0.813	46.0 (29-57)	36.0 (31-46)	0.001	46.0 (29-57)	36.0 (31-46)	0.001	46.0 (29-57)	37.0 (31-46)	0.003
IV群合計	中央値(範囲)	37.0 (16-56)	38.0 (28-49)	0.895	39.0 (16-56)	32.0 (16-47)	0.004	38.5 (16-56)	33.0 (21-48)	0.054	37.5 (16-56)	33.0 (21-48)	0.046
V群合計	中央値(範囲)	42.5 (17-62)	41.0 (34-53)	0.868	45.5 (17-62)	39.0 (31-48)	0.007	44.5 (17-62)	40.0 (31-57)	0.083	45.5 (17-62)	39.0 (31-57)	0.019
VI群合計	中央値(範囲)	9.0 (3-12)	8.0 (6-9)	0.601	9.0 (3-12)	7.0 (6-10)	0.021	9.0 (3-12)	7.0 (6-10)	0.076	9.0 (3-12)	7.0 (6-9)	0.010
合計	中央値(範囲)	173.5 (110-233)	152.0 (144-208)	0.727	173.5 (110-233)	147.0 (128-183)	0.000	176.5 (110-233)	150.0 (132-193)	0.004	176.5 (110-233)	150.0 (132-191)	0.004

Mann-WhitneyのU検定 有意水準p<0.05

表3-2 1年生のディプロマ・ポリシー別能力の有無による卒業時到達度の比較

N=91

卒業時到達目標	n(%)	DP5:新しい技術や知識を探索する姿勢と柔軟な創造性			DP6:効果的な看護実践に向けた主体的に取り組む力			DP7:人間を一人の人格として全体的に捉えた豊かな対人関係能る姿勢			DP8:市民社会の一員として異文化への理解と社会に貢献する姿勢		
		身についた	身についていない	p値	身についた	身についていない	p値	身についた	身についていない	p値	身についた	身についていない	p値
		78(85.7)	13(14.3)		80(87.9)	11(12.1)		85(93.4)	6(6.6)		79(86.8)	12(13.2)	
I群合計	中央値(範囲)	24.0(16-32)	20.0(15-23)	0.000	23.0(16-32)	20.0(15-25)	0.002	23.0(15-32)	20.5(18-23)	0.032	23.0(16-32)	20.0(15-24)	0.000
II群合計	中央値(範囲)	18.0(12-22)	17.0(12-21)	0.193	18.0(12-22)	15.0(12-21)	0.005	18.0(12-22)	15.0(12-17)	0.004	18.0(12-22)	16.0(12-18)	0.001
III群合計	中央値(範囲)	45.5(29-57)	36.0(31-46)	0.020	46.0(29-57)	37.0(31-46)	0.002	46.0(29-57)	36.0(31-42)	0.006	46.0(29-57)	36.0(31-43)	0.000
IV群合計	中央値(範囲)	38.5(16-56)	33.0(16-48)	0.042	37.5(16-56)	33.0(21-48)	0.121	37.0(16-56)	35.0(21-44)	0.299	39.0(16-56)	35.0(26-48)	0.095
V群合計	中央値(範囲)	45.5(17-62)	40.0(31-51)	0.046	43.5(17-62)	40.0(31-51)	0.205	43.5(17-62)	40.5(31-57)	0.635	46.0(17-62)	39.0(34-51)	0.023
VI群合計	中央値(範囲)	9.0(3-12)	7.0(6-9)	0.009	9.0(3-12)	8.0(6-9)	0.243	9.0(3-12)	8.0(7-10)	0.987	9.0(3-12)	7.0(6-9)	0.045
合計	中央値(範囲)	177.0(110-233)	152.0(128-201)	0.008	175.5(110-233)	159.0(132-191)	0.020	175.5(110-233)	154.5(133-193)	0.083	177.0(110-233)	153.5(132-184)	0.004

Mann-WhitneyのU検定 有意水準p<0.05

看護学士課程におけるディプロマ・ポリシーと卒業時到達目標の到達度を用いた教育評価

表4-1 2年生のディプロマ・ポリシー別能力の有無による卒業時到達度の比較

N=88

卒業時到達目標	n(%)	DP1:女性としての幅広い教養と豊かな人間性、倫理観、責任感			DP2:環境の変化や健康問題を発見し解決する能力			DP3:健康課題に対する批判的・分析的・論理的思考能力			DP4:科学的客観的視野に立った確な判断ができる能力		
		身についた	身につけていない	p値	身についた	身につけていない	p値	身についた	身につけていない	p値	身についた	身につけていない	p値
		85(96.6)	3(3.4)		79(89.8)	9(10.2)		74(84.1)	14(15.9)		70(79.5)	18(20.5)	
I 群合計	中央値(範囲)	24.0(16-32)	20.0(20-24)	0.201	24.0(16-32)	22.0(16-24)	0.029	24.0(16-32)	22.0(16-25)	0.007	24.0(16-32)	23.0(16-30)	0.114
II 群合計	中央値(範囲)	18.0(13-24)	18.0(14-28)	0.227	18.0(13-24)	17.0(14-20)	0.026	18.0(13-24)	17.5(14-20)	0.050	18.0(13-24)	17.5(14-23)	0.015
III 群合計	中央値(範囲)	47.0(35-64)	41.0(37-48)	0.274	47.0(35-64)	39.0(37-44)	0.001	47.0(36-64)	43.0(35-50)	0.003	47.0(36-64)	42.5(35-50)	0.002
IV 群合計	中央値(範囲)	42.0(22-55)	48.0(38-48)	0.400	43.0(22-55)	38.0(33-48)	0.343	43.0(22-55)	40.0(25-48)	0.261	43.0(22-55)	39.0(25-48)	0.212
V 群合計	中央値(範囲)	50.0(33-64)	51.0(36-51)	0.696	51.0(33-64)	44.0(36-53)	0.039	51.0(33-64)	45.5(36-53)	0.029	51.0(33-64)	45.5(36-54)	0.126
VI 群合計	中央値(範囲)	9.0(6-12)	9.0(9-9)	0.846	9.0(6-12)	9.0(9-10)	0.091	9.0(6-12)	9.0(6-10)	0.417	9.0(6-12)	9.0(6-12)	0.755
合計	中央値(範囲)	190.0(143-246)	179.0(162-198)	0.554	193.0(143-246)	172.0(150-194)	0.008	193.5(143-246)	174.5(150-200)	0.008	193.0(143-246)	174.0(150-201)	0.018

Mann-WhitneyのU検定 有意水準p<0.05

表4-2 2年生のディプロマ・ポリシー別能力の有無による卒業時到達度の比較

N=88

卒業時到達目標	n(%)	DP5:新しい技術や知識を探索する姿勢と柔軟な創造性			DP6:効果的な看護実践に向けた主体的に取り組む力			DP7:人間を一人の人格として全体的に捉えた豊かな対人関係能力			DP8:市民社会の一員として異文化への理解と社会に貢献する姿勢		
		身についた	身につけていない	p値	身についた	身につけていない	p値	身についた	身につけていない	p値	身についた	身につけていない	p値
		72(81.8)	16(18.2)		79(89.8)	9(10.2)		77(87.5)	11(12.5)		66(75.0)	22(25.0)	
I 群合計	中央値(範囲)	24.0(16-32)	22.5(16-30)	0.004	24.0(16-32)	23.0(16-30)	0.171	24.0(16-32)	22.0(16-24)	0.021	24.0(16-32)	22.0(16-24)	0.000
II 群合計	中央値(範囲)	18.0(13-24)	18.0(14-23)	0.313	18.0(13-24)	16.0(13-23)	0.012	18.0(13-24)	17.0(13-20)	0.001	18.0(13-24)	18.0(13-22)	0.016
III 群合計	中央値(範囲)	47.0(36-64)	42.5(35-50)	0.006	47.0(36-64)	37.0(35-48)	0.001	47.0(36-64)	37.0(35-48)	0.000	47.5(36-64)	42.5(35-50)	0.000
IV 群合計	中央値(範囲)	43.0(22-55)	38.5(25-51)	0.172	43.0(22-55)	36.0(32-48)	0.268	43.0(22-55)	34.0(32-48)	0.341	44.5(22-55)	37.5(25-48)	0.001
V 群合計	中央値(範囲)	51.0(33-64)	45.5(37-57)	0.098	51.0(33-64)	47.0(34-57)	0.240	51.0(33-64)	45.0(34-53)	0.087	51.0(37-64)	44.0(33-55)	0.000
VI 群合計	中央値(範囲)	9.0(6-12)	9.0(6-12)	0.058	9.0(6-12)	9.0(6-12)	0.117	9.0(6-12)	9.0(6-9)	0.007	9.0(6-12)	9.0(6-12)	0.054
合計	中央値(範囲)	193.0(143-246)	171.5(158-207)	0.019	193.0(149-246)	164.0(143-201)	0.038	193.0(149-246)	164.0(143-199)	0.009	194.5(149-246)	169.0(143-200)	0.000

Mann-WhitneyのU検定 有意水準p<0.05

表5 3年生のディプロマ・ポリシー別能力の有無による卒業時到達度の比較

N=97

卒業時到達目標	n(%)	DP3:健康課題に対する批判的・分析的・論理的思考能力			DP4:科学的客観的視野に立った確な判断ができる能力			DP5:新しい技術や知識を探索する姿勢と柔軟な創造性			DP8:市民社会の一員として異文化への理解と社会に貢献する姿勢		
		身についた	身につけていない	p値	身についた	身につけていない	p値	身についた	身につけていない	p値	身についた	身につけていない	p値
		90(92.8)	7(7.2)		92(94.8)	5(5.2)		92(94.8)	5(5.2)		77(79.4)	20(20.6)	
I 群合計	中央値(範囲)	25.0(19-32)	24.0(19-29)	0.044	25.0(21-32)	20.0(19-29)	0.014	25.0(19-32)	22.0(19-29)	0.029	25.0(19-32)	23.5(19-32)	0.002
II 群合計	中央値(範囲)	22.0(17-24)	18.0(18-23)	0.061	22.0(17-24)	18.0(18-24)	0.118	22.0(17-24)	22.0(18-24)	0.843	22.0(17-24)	19.5(17-24)	0.019
III 群合計	中央値(範囲)	55.0(43-64)	46.0(39-58)	0.007	55.0(43-64)	46.0(39-58)	0.009	55.0(43-64)	46.0(39-58)	0.028	55.0(39-64)	50.0(43-62)	0.005
IV 群合計	中央値(範囲)	51.0(39-63)	46.0(40-59)	0.016	51.0(39-63)	45.0(40-57)	0.045	51.0(39-63)	43.0(40-57)	0.027	52.0(40-63)	46.5(39-57)	0.002
V 群合計	中央値(範囲)	55.0(44-68)	48.0(37-62)	0.009	55.0(42-68)	47.0(37-48)	0.001	55.0(42-68)	47.0(37-50)	0.001	57.0(37-68)	51.5(44-57)	0.000
VI 群合計	中央値(範囲)	11.0(6-12)	11.0(8-12)	0.395	11.0(6-12)	9.0(8-12)	0.042	11.0(6-12)	8.0(8-12)	0.028	11.0(8-12)	10.0(6-12)	0.171
合計	中央値(範囲)	219.5(182-257)	189.0(161-242)	0.009	219.0(182-257)	184.0(161-227)	0.007	219.0(182-257)	188.0(161-227)	0.012	223.0(161-257)	206.0(182-229)	0.001

Mann-WhitneyのU検定 有意水準p<0.05 DP 1・2・6・7は身につけていない群(n<3)

表6 4年生のディプロマ・ポリシー別能力の有無による卒業時到達度の比較

N=74

卒業時到達目標	n(%)	DP3:健康課題に対する批判的・分析的・論理的思考能力			DP4:科学的客観的視野に立った確な判断ができる能力			DP5:新しい技術や知識を探索する姿勢と柔軟な創造性			DP8:市民社会の一員として異文化への理解と社会に貢献する姿勢		
		身についた	身につけていない	p値	身についた	身につけていない	p値	身についた	身につけていない	p値	身についた	身につけていない	p値
		71(95.9)	3(4.1)		71(95.9)	3(4.1)		71(95.9)	3(4.1)		52(70.3)	22(29.7)	
I 群合計	中央値(範囲)	25.0(21-32)	19.0(18-20)	0.000	25.0(19-32)	23.0(18-29)	0.000	25.0(20-32)	19.0(18-24)	0.010	25.0(20-32)	24.0(18-29)	0.030
II 群合計	中央値(範囲)	20.0(18-24)	17.0(17-20)	0.038	20.0(17-24)	18.0(17-22)	0.038	20.0(17-24)	20.0(17-24)	0.816	20.5(17-24)	19.0(17-24)	0.120
III 群合計	中央値(範囲)	55.0(43-64)	46.0(38-46)	0.000	54.0(43-64)	50.0(38-60)	0.000	55.0(43-64)	46.0(38-53)	0.053	56.0(46-64)	50.0(38-63)	0.005
IV 群合計	中央値(範囲)	52.0(42-64)	42.0(41-44)	0.000	52.0(42-64)	45.0(41-47)	0.000	52.0(42-64)	42.0(41-54)	0.104	53.0(44-64)	47.0(41-63)	0.000
V 群合計	中央値(範囲)	56.0(44-68)	49.0(41-53)	0.053	56.0(41-68)	53.0(51-58)	0.053	56.0(41-68)	53.0(49-62)	0.756	57.5(41-68)	51.0(44-66)	0.002
VI 群合計	中央値(範囲)	11.0(9-12)	9.0(9-9)	0.032	11.0(9-12)	11.0(9-12)	0.032	11.0(9-12)	9.0(9-12)	0.430	11.0(9-12)	10.5(9-12)	0.176
合計	中央値(範囲)	218.0(185-264)	177.0(176-185)	0.000	218.0(177-264)	200.0(176-226)	0.000	218.0(177-264)	185.0(176-229)	0.117	224.0(177-264)	201.5(176-253)	0.001

Mann-WhitneyのU検定 有意水準p<0.05 DP 1・2・6・7は身につけていない群(n<3)

関係能力形成につなげることを目的に、「看護ゼミナール」を開設した。本科目は、I~IVまで設けられ、1年生と4年生は必修科目とされている。体験する社会活動は個人またはグループ単位で選択するため、主体性や協調性が求められることから、DP 8の到達度にも影響していると推察される。この点で、旧カリキュラムの学生との学習機会の差があり、特に4年生は、履修すべき授業や実習単位が少なく、後期は国家試験勉強が中心となることから、人との交流機会も減少している。これらを考慮し、新カリキュラムの学生には今後も社会活動の機会を学びに変えられるように働きかけ、その成果を継続的に評価するとともに、それらの機会に乏しい旧カリキュラムの学生には、社会に貢献できたと思える機会を意図的に設けるなどの働きかけが必要と考える。

DP 1は、1年生から到達度が高く、全体の平均も最も高い結果であった。平賀(2019)は、新カリキュラムを見据えた3つのポリシーの見直し方、考え方の中で、ディプロマ・ポリシーの評価について、1年次であっても卒業時の姿に近づく部分があってよいという考えを述べ、1、2年次の科目は学生にどんな意味があるのかという問いを投げかけている。A大学のDP 1は、「豊かな教養と深い専門知識を有し、高い志のもと、社会に貢献し信頼される人材を養成すること」という大学の使命・目的を反映したポリシーであり、カリキュラム・ポリシーには全学科(食物栄養学科、児童教育学科、看護学科)に、「女性のライフサイエンス」、「社会貢献論」を初年次教育の必修科目とすることを掲げている。さらに、看護学科では、DP 1の達成のために特に重要な科目として一部の専門科目を除く概ね全ての科目をカリキュラム・マップに位置づけており、このような教育の特徴が、結果に表れている可能性がある。今後、そのエビデンスを示し、教育の特色や強みとなる部分をアピールしていくことも必要と考える。

2年生においてDP 3、4、5、7、8の到達度が1年生より低い結果であった。看護大学生の自己学習力を調査した研究(根岸、柴田、藤井、他、2015)では、学年による比較で3年生の得点が最も低かったことが報告されている。また、服部ら(2015)は、看護学士課程2年次生の自己教育力の調査において、対象者らの自信・プライド・心理的安定性が低かったことに言及し、スモールステップで目標を達成できる成功体験の積み重ねなどの

必要性を述べている。このように、自己教育力は、課題の目的・目標や教育方法、教育環境、学生の特徴等により変化する(服部、中村、林、他、2015)。本研究の対象者らは、2年生の2月に初めて看護過程を展開する実習を体験するため、そこで生じた課題がDP到達度の低さに影響している可能性がある。これに比して、DP 2~7のポイントが3年生で飛躍的に高くなっていたことは、半期集約されている領域別実習において、適切な支援がなされた教育の成果と評価できる。

2016年に中央教育審議会から示された「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)、「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受け入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン(中央教育審議会大学分科会大学教育部会、2016)では、ポリシー策定にあたっての留意点として、DPを踏まえた教育課程の編成や学修成果の評価の具体化が挙げられている。ここまで、調査結果から推察されることを述べてきたが、DPの評価にあたって、その判断基準の不明確さが結果に影響している可能性も考慮する必要がある。例えば「豊かな人間性、倫理観、責任感を身につけている」というDP 1は、何をもって達成できたとするのか、その判断は学生に委ねられているのが現状である。今後は、DPごとの評価基準となるDPカリキュラム・ルーブリック(嶋澤、田中、北、2019)など他大学の先駆的な取り組みを参考に、評価を具体化し、学生、教員の共通理解が図れるような検討が必要と考える。

2. ディプロマ・ポリシーと卒業時到達目標の到達度との関連

卒業時到達目標の群別の合計点と各学年のDPの身についた群と身につけていない群との比較では、DP 1以外、いずれかの学年で卒業時到達目標の到達度に有意な差がみられ、互いの関連が示された。このことは、DPの評価が必要とされる看護実践能力に応じて適切になされていることを示すものと考えられる。また、DPの評価指標として、卒業時到達目標を活用することの有用性を示す結果といえる。これは、先に述べた教育評価の具体化にあたる。一方で、有意差のみられた卒業時到達目標の群は、全ての学年で一致していたものもあったが、学年間でばらつきがあった。今後は評価をより明確にするために、本調査で得た関連性を考慮しながら、

到達目標群の下位項目との対応を検討し、可視化していく必要がある。

V. 結論

1. 4年生は、DP1～7で身につけている群の割合が高かったが、DP8は全学年の中で最も低かった。
2. DP2～7において、学年間に有意差がみられ、2年生と3年生の差が最も顕著であった。
3. 1年生は、DP8の身についた群の割合が全学年の中で最も高く、新カリキュラムが到達度に貢献している可能性が示された。
4. 卒業時到達目標の群別の合計点と各学年のディプロマ・ポリシーの身についた群と身につけていない群との比較により、DP2～8と卒業時到達目標の関連があることが示された。
5. 今後、教育の特徴や強みを示していくことや、新旧カリキュラムによる到達度の差を補う働きかけが必要である。また、卒業時到達目標とDPとの対応を検討するなど、評価内容の具体化、可視化を図るとともに、継続的な調査による分析が必要である。

VI. 研究の限界と今後の課題

本調査は、横断的な調査であり学年ごとの学生の傾向や教育内容の違いなどが調査結果に影響している可能性がある。今後も調査を継続し、教育の評価・改善につなげていく必要がある。

謝辞

本研究に同意していただいた学生の皆さまに厚くお礼申し上げます。

本研究は、千里金蘭大学奨励研究の助成を受けて実施した。

文献

中央教育審議会大学分科会大学教育部会. (2016). 「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)、「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受け入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン. 2020年8月31日閲覧
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/

chukyo/chukyo4/houkoku/___icsFiles/afielddfile/2016/04/01/1369248_01_1.pdf

服部紀子, 中村博文, 林さとみ他. (2015). 看護学士課程2年次生の自己教育力と看護実践能力との関連. 横浜看護学雑誌, 8 (1), 39-48

平賀元美. (2019). カリキュラム評価・開発のポイント 新カリキュラムを見据えた3つのポリシーの見直し方、考え方. 看護展望, 44 (9), 38-41

厚生労働省. (2019). 看護基礎教育検討会報告. 2020年2月16日閲覧

<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>

文部科学省 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. (2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～. 2020年2月17日閲覧

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/___icsFiles/afielddfile/2017/10/31/1397885_1.pdf

文部科学省. (2018). 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申). 2020年2月16日閲覧

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/___icsFiles/afielddfile/2018/12/20/1411360_1_1_1.pdf

根岸貴子, 柴田滋子, 藤井広美他. (2015). 看護大学生における学年ごとの自己学習力の特徴. 了徳寺大学研究紀要, 9, 193-201

日本看護系大学協議会. (2018). 看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標. 2020年2月18日閲覧

<https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf>

嶋澤順子, 田中幸子, 北素子. (2019). ディプロマ・ポリシーを真に達成するカリキュラム構築の取り組み PDCAサイクルが循環するカリキュラムのしくみを創る. 看護展望, 44 (9), 52-58

